

エトルリアの戦車

—その機能の変遷—

前野弘志

【キーワード】エトルリア, 戦車, 国家

1. はじめに

小論の目的は、エトルリアを中心として、古代地中海世界における「戦車」(戦うために馬に引かせる車)の機能の変遷を跡付けることにある。戦車には5つの要素(戦闘・運搬・高価・高速・回転)が常に備わっており、これらのうちどの要素が突出するかによって、ある地域ある時代における戦車の意味合いに違いが生じたと考えられる。従って戦車は単なる兵器ではなく、極めて多義的であり、時代の様態を映し出すモノの1つであったと言える。筆者の当面の関心は、都市ローマの起源(伝承では前753年)と戦車競技との関係にあり、小論はその予備的考察に位置づけられる。小論では「エトルリアの戦車」(エトルリア時代のイタリア半島の戦車)に関する2種類の史料(①出土した戦車、②地下墓壁画に描かれた戦車)を考察対象とする。壺絵やレリーフなどについては別の機会に論じたい。本題に入る前に、エトルリアの地理的範囲と時代区分の概略を述べておこう。

2. エトルリアの地理的範囲と時代区分

1) 地理的範囲

エトルリア地方は、北辺(東西に流れるアルノ川)、東辺(南北に流れるティベル川)、西辺(両川の河口を斜めに結ぶティレニア海沿岸)の3辺に囲まれた地域であり、北辺と東辺はアペニン山脈の麓に位置する。沿岸部と内陸の渓谷地帯は大小多くの河川によって結ばれ、渓谷地帯からアペニン山脈を越えてアドリア海へ抜ける道もあった。この地域を故郷としたエトルリア人は、ティベル川を越えて南下しカンパニア地方に、またアルノ川とアペニン山脈を越えて北上しポー川流域に定住した¹⁾。エトルリア地方には、固有の制度や文化を持った自治独立の都市国家が多数存在し、最も有力な都市は(入れ替えもあったが)、エトルリア人共通の聖域を本部とした十二都市連合を構成した。大都市は中小の都市を従属させたり、直接海に面しない大都市は小さな港町を所有することもあった²⁾。

2) 時代区分³⁾

(1) 初期鉄器時代(前900~720年頃)「東方からの刺激と対応」:この時代はヴィッラノーヴァ文化(前900~725年頃)と一致する。前900年頃、それまで平地に散在していた村落が放棄され、いくつもの丘の上に村落集合体と共同墓地が築かれるようになった⁴⁾。初期段階ではそれぞれ自律的であったが、前8世紀になると、外からの刺激を受けて、有力な村落集合体が他を統合し、輸入陶器を副葬する有力な首長が出現した。外からの刺激とは、フェニキア人やギリシア人が金属資源を求めて当地を訪れるようになったことである。その刺激に対応するために、エトルリア社会の再編が起こったのである。ギリシア人の前線基地は、ナポリ湾の沖にあるイスキア島の植民市ピテクーサイ(前750年以前に建設⁵⁾)であり、東地中海世界とエトルリアの交易を仲介した⁶⁾。一方、エトルリア人も自らの交易網を構築し、ティレニア海の制海権を握り、前9世紀にはカンパニア地方に植民し、前8世紀前半には地中海域に乗り出していた⁷⁾。鉱山開発が始まるのも前8世紀である⁸⁾。交易網も鉱山開発もエトルリア人共通の関心事であり⁹⁾、ヴィッラノーヴァ文化こそエトルリア文化の直接の祖先であった¹⁰⁾。

(2) 東方化様式時代(前720~575年頃)「都市化と最盛期」:エトルリア人が民族として把握できるようになったのは前700年頃からである¹¹⁾。前7世紀は都市化の時代であり、商業活動に富の源泉を持つ支配者層は、自らの存在を理念的に強化するために造形言語(都市建設、公共建築物、豪華な墳墓、彫像、大絵画、陶器、青銅品など)を作らせた¹²⁾。彼らの造形言語は東方化様式を好んだ。前8世紀以降、エトルリア人はシリアやレヴァント地方(地中海東海岸)からの製品を大量に輸入していたが¹³⁾、これらを運んだのはフェニキア商人であり、東方的モチーフはエトルリアの工房でコピーされた¹⁴⁾。ギリシアの都市コリントスの貴族デマラトスは、エトルリアと大規模な交易を行っており、祖国で政変が起こった時、芸術家たちを引き連れてタルキニアに亡命したという(前657年)¹⁵⁾。エトルリア=コリントス壺絵が始まるのは前630年頃である¹⁶⁾。エトルリア人はギリシア人の工人を喜んで受け入れ、イオニア地方から来たギリシア人は、カエレに工房を建て「カエレ式ヒュドリア」が製作され、カエレ、タルキニア、ヴルチに絵付け師の養成所を設立し「イオニア=エトルリア様式」が作られた¹⁷⁾。エトルリアの製品は、前7世紀の最後の数十年から前6世紀の初めの数十年の間、シチリア、サルデーニャ、南フランス、スペイン、北アフリカ、ギリシア、小アジア、キプロス、シリアに盛んに輸出された¹⁸⁾。

(3) アルカイック時代(前575~490年頃)「ギリシア人の挑戦」:前6世紀半ばからエトルリアの制海権が動揺し始めた。危機の原因の1つは西方に向かうギリシア人の植民活動であり、もう1つは西地中海におけるカルタゴの覇権である。ギリシア植民市がティレニア海を包囲すると、ギリシア製品の輸出が盛んになり始めたのと対照的に、エトルリア製品の輸出が徐々に減少し、ついに消滅したことが考古学的に証明されている¹⁹⁾。前545年頃、バルシアの支配を逃れたイオニア地方のギリシア都市フォカイアからの亡命者たちが、エトルリアに直面するコルシカ島のア

ラリア（30年前に建設されていた²⁰⁾）へ移住しようとした時、軍事衝突が起こった。エトルリア（主としてカエレ）がギリシアのライバルであるカルタゴに支援を求めると、カルタゴ＝エトルリア連合軍はギリシアからの新来者の撃退に成功した²¹⁾。ポー川流域にエトルリア人が植民活動を開始したのも前6世紀末以降のことで、その原因の1つとして、ティレニア海におけるエトルリアの制海権の動揺の代償としてアドリア海への出口を求めた可能性がある²²⁾。もう1つの危機対応策が、前6世紀における「十二都市連合」の設立であった²³⁾。

（4）クラシック時代（前490～350年頃）²⁴⁾「制海権の喪失」：前9世紀から続いたエトルリアの繁栄は、前5世紀初頭をもって終焉する²⁵⁾。前504年にキュメの僭主がエトルリア軍に甚大な損害を与え、前474年にシラクサの僭主がキュメ沖でエトルリア艦隊を敗走させて、カンパニア地方への道が閉ざされた²⁶⁾。前396年にローマがヴェイイを征服し（最初に征服されたエトルリア都市）、前384年にシラクサの僭主がチェルヴェテリ（古代名はカエレ）の外港ピュルジの神域を略奪した²⁷⁾。

（5）ヘレニズム時代（前350～100年頃）「ローマへの同化」：キウジがローマに征服されたのは前295年、オルヴィエト（古代名はウォルシニイ）とヴルチは前280年、チェルヴェテリは前273年である。北部のエトルリア諸都市は自治独立のままとされる代わりにローマを支持し、前205年にスキピオがカルタゴに対する戦争に際して、彼らを援軍として徴募した²⁸⁾。前2世紀からエトルリアの上流階級はローマの元老院議員となり、前90～88年の同盟市戦争の結果、エトルリアにはローマ市民権が付与され²⁹⁾、これ以後「エトルリア」という語は、民族的・文化的まとまりを表す語としては無意味となった³⁰⁾。

3. 出土した戦車

1) 戦車の伝播

イタリア半島の出土戦車に関するまとまった研究書としてはWoytowitsch [1978]³¹⁾とEmiliozzi [1999]が挙げられる。小論ではより新しい後者に依拠する。

（1）近東（メソポタミア）：近東において最古の描かれた戦車は前2000年紀初頭に遡る。戦車の使用は近東から拡散し、エジプトそしてギリシアへと伝播した。戦車が普及した理由は、その軍事能力の高さとそれに備わる威信材としての価値である。戦車の速度と操縦性を発揮するには広大で平らな土地が必要であった。メソポタミア地方においては元々、一對のロバ・ラバ・馬などに牽引させる二輪あるいは四輪の車があったが、それに5つの革新（①スポークのある二輪、②馬だけによる牽引、③鼻輪に替えた馬銜（はみ）の採用、④武器としての弓の使用、⑤二人の搭乗者が横に並んで立てる幅の台車）が加えられて真の戦車が誕生した³²⁾。

（2）エジプト（新王国）：エジプトには詳細に描かれた戦車のレリーフが多数あり、また前14世紀のツタンカーメンの墓からは6両の戦車が出土した。軽い戦車の台車は馭者と射手が横に並

んで立てる幅があり、走行しながら弓が発射でき、敵の歩兵隊の前を走って隊列を乱したり、包囲・追撃した。一方、前13世紀のカデシュの戦いを描いたレリーフには、前に射手と盾持ち後に槍を持った戦士の3人が搭乗しており、この場合、戦車が戦士を戦場へ輸送する手段として使用された。また近東でもエジプトでも一般的に、勢子を引き連れた狩猟や儀式においても戦車が使用された³³⁾。

(3) ギリシア(ミケーネ)：近東で生まれた戦車は、クレタ島を經由してギリシアに伝播した。ギリシアにおいて確認される最古の戦車は絵画資料で、後期青銅器時代の前17世紀末から前16世紀のものである。ミケーネ時代の前14世紀から前13世紀には、戦車を管理したのは王宮であり、戦場で徒歩で戦う戦士を運ぶために、戦車が走る道路や橋を建設・維持したのも王宮であったことが線文字B文書から知られている。ミケーネ時代の諸王国は「暗黒時代(前11世紀から前9世紀)」に滅びたが、戦車は生き残った。『イリアス』(前750年頃に成立³⁴⁾)には、一騎打ちする貴族戦士を戦場に送迎する戦車の場面がしばしば描かれ、戦車競技の場面も克明に描写されている³⁵⁾。

パトロクロスに捧げられた葬儀と競技の様子は『イリアス』23巻に叙述されている。ここでは葬儀と競技の進行と概略を簡潔にまとめる。〈葬儀と競技は3日にわたった。初日に通夜、二日目に葬列、殉葬、火葬、三日目に骨上げ、納骨。それが終わるとアキレウスは、帰ろうとする会葬者を引き留め、競技会の開催を宣言する。最初の種目が戦車競技であった。アキレウスは自分の陣屋から賞品を運んでこさせ、皆の前に披露する。1等賞は女たちと鼎、2等賞は馬、3等賞は釜、4等賞は金の延べ棒、5等賞は酒杯である。出場者を募ると、エウメーロス、ディオメーデース、メネラーオス、アンティロコス、メーリオネースの5人が自ら名乗りをあげた。はるか遠方に一本の(古人の墓標のような)枯れ木が柱のように立てられ、二つの白い石が柱にもたせかけてある。これは折り返し標柱で、そこには審判が配置されている。5両の戦車はその柱を目指して走り、柱すれすれに左回りに旋回して帰ってくる一周レースである。まず籤引きが行われ、何の順番かは定かでないが、おそらくポジション取りだろう。一番左が柱に近いので有利である。籤引きが終わると、皆一列に並び、一斉に出走する。重量を軽減させるため、台車は蔓細工の籠のようなもので、車体は時に宙に跳ね上げられる。先頭集団が折り返し標柱をターン。先頭はエウメーロス、それを追うディオメーデース。ところがエウメーロスの戦車の軛(くびき)が破損、二頭の馬が離れて、轅(ながえ)が地面に接触、その衝撃で彼は落車、負傷。この時点で先頭はディオメーデース、二番手にメネラーオス、三番手にアンティロコス。アンティロコスは窪んだ狭い道でメネラーオスを抜こうと無理に攻める。メネラーオスはアンティロコスの危険行為に抗議しつつ、衝突を回避するため止むなく減速、アンティロコスに抜かれる。観戦者たちも興奮、最初に姿を現すのは誰かで喧嘩が勃発、賭けにまで発展。結果は、1等ディオメーデース、2等アンティロコス、3等メネラーオス、4等メーリオネースとなった。エウメーロスは落車したた

め失格した。ところがアキレウスは、アンティロコススの反則行為を指摘し、彼から2等賞を剥奪し、本来実力のあるエウメーロスに2等賞を与えることを提案する。するとアンティロコスは猛抗議し、その抗議が気に入ったアキレウスは、エウメーロスには特別賞を与えることとする。アンティロコスも自分の反則行為を認め、2等賞をメネラーオスに譲ることを申し出て、両者は和解する。そしてアキレウスは、余った5等賞を、パトロクロスの記念品として、年老いたネストールに与える。以後、ボクシング、レスリング、短距離走、一騎打ち、砲丸投げ、弓、槍投げの競技が行われた³⁶⁾。以上の叙述によると、同じ人物が複数の競技に出場していることから、一流人士しか出場できなかったようである。また競技の結果は、必ずしも結果通りではなく、いろいろな斟酌を加えたこと、命を落とすような危険行為を避けたことから、フェアプレーに基づきながらも、全くの実力重視とは言い難く、あくまで余興としての性格が強かったように見える。さらに賞品には、新しい物が多いが、古い由緒ある物や故人の遺品も含まれていたことから、一種の形見分けでもあったようだ。

前7世紀になると、ギリシアでファランクス（重装歩兵密集隊戦術）が出現し、戦場で一騎討ちをする貴族戦士を送迎する戦車の出番は減少し、代わりに宗教儀礼に伴う競技での使用が増加した。オリンピア祭に戦車競技が導入されたのは前680年のことであった³⁷⁾。

(4) イタリア：Emiliozzi [1999] に登録された出土戦車の数は280である³⁸⁾。これらの戦車は、その所有者（男性あるいは女性あるいは両方）とともに墓に埋納された状態で発見され、その大部分は後のローマ人の *currus* と同様に馭者が立って操縦するタイプであり、残りは現在の *calesse* と同様に座って操縦するタイプである。初期エトルリアの戦車は、初期鉄器時代の前8世紀後半から前7世紀初頭にまで遡り、ミケーネと同様、はじめは武装した貴族戦士を戦場まで送迎するのに使われていた。しかし後代の戦車は儀式のみに使用されるようになり、所有者の戦士としての徳を誇示する豊富な装飾が施されて、専ら貴族階級の社会経済的優位性を顕示する威信材としての機能のみを持つようになった。しかしこれらの戦車は、葬儀のために作られた訳ではなく、被葬者の生前から様々な機会（祝賀パレードや婚礼など）に使用された痕跡が見認められる³⁹⁾。

2) イタリア半島で出土した戦車

(1) 地域分布と時代分布：Emiliozzi [1999] の分布図（310頁）を見ると、戦車の出土地は3つの地域に集中しており、エトルリア人が住む3地域（エトルリア地方とその周辺、カンパニア地方とその周辺、ポー川流域とその周辺）と重なる。筆者は上掲書の目録（311-335頁）を基に表1を作成した。

表1を見ると、戦車を墓地に副葬する習慣は、初期鉄器時代に始まり、東方化様式時代にピークを迎え、その後は急速に廃れていくことが分かる。この習慣の中心地は3つあり、最初で最大の中心地は「ティレニア海沿岸のエトルリア地方」およびそれに隣接する「古ラティウム地方」

と「アグロ・ファリスコ地方」である。同時代のもう1つの中心地は「ポー川流域（エトルリア的）」と「ルコ・メルノ地方」で、意外なことに、エトルリア人の移住よりも前の時代に当たる。さらにもう1つの中心地は少し遅れてアペニン山脈北側のアドリア海沿岸に位置する「ピチェノ地方」である。一方、より早く植民しギリシア人とも濃厚接触のあった「カンパニア地方とその周辺」は意外と遅く少ない。このことから、戦車を副葬する習慣のイタリア半島への伝播ルートは、ギリシア植民市経由の南ルートではなく、ギリシア人とは疎遠な北ルートであったように見える。

(2) 都市別古い順トップ10：次に、どの都市がこの埋葬文化の発信源であるかを知るために、筆者は同じ目録に基づいて表2を作成した。

表2を見ると、最古はヴェイイであり、この都市が先駆者であったことが分かる。また二番は

表1：地方別・時代別の出土数比較

三大地域	文化的地方	初期鉄器時代 (前900~720年頃)	東方化様式時代 (前720~575年頃)	アルカイック時代 (前575~490年頃)	クラシック時代 (前490~350年頃)
エトルリア地方 とその周辺 小計 (203)	ティレニア海沿岸のエトルリア地方 (98)	15	74	9	
	古ラティウム地方 (24)	8	15	1	
	アグロ・ファリスコ地方 (13)	4	8	1	
	アグロ・カペナテ地方 (4)		4		
	ウンブリア地方 (5)		2	3	
	サピナ地方 (3)		2	1	
	サンニオ地方 (2)		2		
カンパニア地方 とその周辺 小計 (15)	ピチェノ地方 (54)		51	2	1
	カンパニア地方 (エトルリア的) (4)	1	3		
	カンパニア地方 (非ギリシア的) (3)		3		
	カンパニア地方 (ギリシア的) (1)		1		
	ルカニア地方 (1)				1
	北ルカニア地方 (2)		1	1	
ポー川流域と その周辺 小計 (35)	ダウニア地方 (4)			2	2
	ポー川流域 (エトルリア的) (20)	3	17		
	ルコ・メルノ地方 (8)	4	4		
総計 (253)	ゴラセッカ地方 (7)		4	1	2
		小計 (35)	小計 (191)	小計 (21)	小計 (6)

※ 出土地不明・年代不明の27例を除く

表2：都市別古い順トップ10年代比較

文化的地方	都市名	775-750	750-725	750-680	730	730-720	730-700	725-700	720-710	720-700	720-630	710-700	710-690
ティレニア海沿岸のエトルリア地方	ヴェイイ (15)	1	2			3				9			
古ラティウム地方	カステル・ディ・デチマ (4)		1		1			1		1			
ルコ・メルノ地方	プファッテン (4)			4									
古ラティウム地方	ヴェレトリ (1)						1						
古ラティウム地方	ローマ (2)							1				1	
アグロ・ファリスコ地方	ナルチェ (4)							1		3			
ポー川流域 (エトルリア的)	ポローニア (5)							3					2
古ラティウム地方	ラヴィニウム (1)								1				
カンパニア地方 (エトルリア的)	ポンテカチャーノ (1)									1			
古ラティウム地方	ヴィーニヤ・バトッキ (1)										1		

ラテン人の都市、三番はポー川流域周辺の都市である。意外なことに、エトルリア地方のエトルリア人都市よりも、それに隣接するラテン人都市の方が多く、全体の半数を占めている事実は興味深い。その中にローマも含まれ、ヴェイイとはティベル川を挟んだ目と鼻の先に位置する。以上の考古学的文脈からすれば、都市ローマが建設されたとされる年（前753年）にローマで戦車競技が行われたという伝承は、全くの絵空ごととも言えないだろう。

3) モンテレオーネ出土戦車

現存するエトルリアの戦車の中で最も保存状態のよいものは「モンテレオーネ出土戦車」である。これをモデルとして、当時の戦車の具体例なイメージを描きたい。以下、この戦車に関する情報は、その復元作業に携わった Emiliozzi [2011] に主に依拠する⁴⁰⁾。

(1) 発見・購入・復元：Monteleone di Spoleto 村はウンブリア州ペルーギア県のヴァルネリア溪谷にあり、ここは古代においてサビニ人が住んでいた領域内の北部分に当たり、「内サビナ」あるいは「上サビナ」と呼ばれ、アペニン山脈の中心に位置し、広い溪谷に大小いくつもの川が流れる所で、ローマの北東、ティベル川の支流ネラ川の右岸に位置する。この村からおよそ2マイル（約3.2km）離れた、標高3,000フィート（約910m）のところに、Colle del Capitano と呼ばれる丘がある。1902年にこの丘の上に住む村人が、自分の敷地に新しい家を建てるため、古い家の前にある盛り上がった土地を、それが古代の地下墓の上に築かれた塚であるとは知らずに、平らにしたとき、青銅の鉢や鉄の鼎、宴会用品とともに分解された状態で副葬された戦車を発見し、それらをしばらく自宅に保管していたが、ガラクタ屋に鉄屑の量り売りの値段で売ってしまった⁴¹⁾。それからさまざまな人の手を渡った後、それらの遺物は1903年にニューヨークのメトロポリタン博物館によって購入され、同年に復元された。しかしその復元が不十分であったため2002年に分解され、2007年のギリシア・ローマ展示室の展示替えに合わせて再復元された⁴²⁾。

(2) 外観とサイズ：この戦車は二輪の二頭立てで、木製の車輪・車体・轆（ながえ）・軛（くびき）は青銅で覆われ、打ち出しと切り出しで装飾されており、鑄造はない。台車には青銅の3枚のパネルが立てられ、搭乗者から見て前面にある中央のパネルは、左右のパネルより背が高い⁴³⁾。パネル以外にも小さな様々な装飾が随所に施されている。復元された戦車のサイズは、全高127cm、全長305cm、全幅143cm、車輪間93cm、車体高85cm、車体長90cm、車体幅50cm、轆220.5cm。主なパーツのサイズは、「中央パネル」高82.5cm、周幅71cm、「右側パネル」高47cm、幅37cm、「左側パネル」高47.5cm、幅37.5cm、片方の軛の周長45cm、鉄輪を含まない車輪の直径62cmである⁴⁴⁾。

(3) 年代：コッレ・デル・カピターノの丘には、青銅器時代（前12世紀末）から初期鉄器時代（前10世紀）までの地下墓が検出され、前8世紀のものは僅か、前7世紀のものは全くないが、前6世紀以降の地下墓は検出される⁴⁵⁾。戦車の年代は、それが発見された地下墓から出土し

た Little Master lip-cups (「細密画家の杯」⁴⁶⁾) と密接に結び付けられており、その製作時期は前550-540年なので、戦車の所有者の埋葬はこの時期より後ということになるが、戦車には副葬される前に長期間にわたって使用された痕跡があるので、カップの年代が戦車の年代を指すとは限らない。戦車の構造から見ると、カプア出土の戦車(前580年頃)より後、カステル・サン・マリアーノ出土の戦車1(前530-520年)やカストロ出土の戦車(前520年頃)より前、アッピア・アンティカ出土の戦車(前575-550)と類似点があり、また図像学的に見ると、東ギリシア・スタイル(前6世紀前半)と類似性が認められることから、総合的に判断して、戦車の製作は前560-550年に年代づけられる⁴⁷⁾。この時代、戦車を副葬する習慣は、エトルリア地方やラティウム地方では既に下火になっていた⁴⁸⁾。

(4) 所有者：この戦車が発見された墓からは、1人の男性と1人の女性の遺骸が発見され、男性がこの豪華な戦車の所有者であったと考えられる⁴⁹⁾。しかしこの男性は戦車の最初の所有者ではなく、戦車を作らせた最初の所有者は戦車をしばらく使用した後に、おそらく死に際して戦車を後継者に譲り、後継者である二番目の所有者が戦車とともに埋葬されたと推測されている⁵⁰⁾。いずれにせよ戦車の所有者はモンテレオーネ・ディ・スポレートの首長であり、彼らの富の源泉はこの地方が、近隣のネラ溪谷やコルノ溪谷といった低域、リエティ平野、そしてアドリア海との交易ルートを支配する位置にあったこと、またチェッレト、ノルシア、カシャなどを通るヴァルネリア溪谷の交易路網のハブであったこと、さらに鉄鉱床を有していたことに由来すると考えられる。牧羊、農業、交易路の管理が首長を生み出し、この地域の軍事的・経済的・政治的・宗教的なリーダーとしたのである⁵¹⁾。

(5) 「戦闘戦車」と「パレード戦車」：前8世紀後半から前6世紀に戦車の台車は幅の狭い長方形で、2人が搭乗する場合、横に並ぶことは不可能で、前方に馭者が後方に戦士が乗った。速く走ることを目的とする軽いタイプは「戦闘戦車」と呼ばれ、一方、人が歩くペースに合わせてゆっくり移動することを目的とする重いタイプは「パレード戦車」と呼ばれる。ローマの傍のカステル・ディ・デチマ15号墓で出土した戦車(前720-710⁵²⁾)は前者の最古の例である。両タイプの相違点は3つある。まず台車に立てられた手摺りの形状で、前者のものの上部は搭乗者が振り落とされないように握れるようになっていたが、後者のももの上部は皮革などに覆われて握れないようになっていた。また後者の手摺りの側面には、装飾が施された青銅のパネルが嵌め込まれていた。そして前者の台車の床は軽い皮革が編まれていたが、後者のそれは重い木の板を並べ青銅の覆いが付いていた。モンテレオーネ出土戦車は、後者の3つの特徴を全て備えた「パレード戦車」である⁵³⁾。一方、壁画・レリーフ・壺絵に基づいて「パレード戦車」と「戦闘戦車(レース戦車)」の見かけ上の違いはなく、両者は転用可能であるとする説もあるが⁵⁴⁾、重い戦車が早く走行できるとは思えない。

(6) 工房：この戦車は車大工と青銅細工師の協同作業であり、それが製作された都市はオル

ヴィエトないしヴルチ、おそらくヴルチと推測されている。戦車の装飾から見て、戦車作りの棟梁は、イオニア様式（東ギリシアの美術）の影響を受けたエトルリア人、あるいはエトルリアに移住した東ギリシア出身のギリシア人と考えられている⁵⁵⁾。

（7）図像分析：この戦車には大小様々な多数の装飾が施されているが、ここでは3枚のパネルの図像に着目する。

a) 「中央パネル」：ここに描かれた「テティスがアキレウスに武具を渡す場面」は、ギリシア陶器などによく描かれたものである。ただこの場面は、アキレウスの故郷「プティアにて」と戦場「トロイにて」の2種類があり、両者を見分ける指標はあるが、時代によって変化する。そこで両者の見分け方について確認しておこう⁵⁶⁾。

まず「プティアにて」の図像は、*LIMC, I/2, Achilleus: 186-205*に集められ⁵⁷⁾、ほとんどはアッティカ黒絵式壺絵で、年代は前570/60年頃から前540/30年頃⁵⁸⁾、前6世紀中頃に好まれた図柄と言える⁵⁹⁾。これはアキレウスが親友パトロクロスおよび教育係ポイニクスとともに故郷プティア（テッサリア地方の南東部にあったとされる王国⁶⁰⁾）から戦場トロイへ向けて出征する際の家族の別れの場面であり、母テティス（海の女神）および彼女の妹たちネレイス（海の精霊、50人とも100人とも）の手から盾、兜、鎧、脛当などの武具が渡される場面であり、息子を見送る父ペレウス（プティア王）が加えられることもある⁶¹⁾。この場面の叙述は、ホメロスの『イリアス』には出てこないの、今では失われてしまった別の叙事詩に由来するものと考えられている⁶²⁾。

次に「トロイにて」の図像は、*LIMC, I/2, Achilleus: 506-541a*に集められ⁶³⁾、アッティカ赤絵式壺絵が多く、年代は前470/60年頃から前430/20年頃に集中している一方で、アルカイック期のもも3点ある⁶⁴⁾。これは戦死したパトロクロスの亡骸を自分の陣屋の中に安置し、その傍に置かれた椅子に座ってうなだれているアキレウスの前に母テティスが現れ、パトロクロスに貸したため彼の遺骸から剥ぎ取って奪われた自分の武具の代わりとして、新しい武具をアキレウスに手渡す場面である。この場面の叙述は、ホメロスの『イリアス』(XIX.10-13)に出てくるので、それに従ったものである⁶⁵⁾。この構図の特徴は、アキレウスに武具を渡すのはテティスのみであり、「プティアにて」の図像とは異なり、ネレイスたちが描かれぬ点にある⁶⁶⁾。

ところが、前450年前後に作られた赤絵式壺絵には、『イリアス』の叙述に反して、「トロイにて」の図像でありながら、テティスに加えてネレイスも描かれるようになる。この変化は、前490年頃に上演されたアイスキュロス（前525/4?-456/5年⁶⁷⁾）の『アキレウス物語』三部作の影響によるもので⁶⁸⁾、彼がコロス（合唱舞踊隊）にネレイスの役を割り当てたことに由来すると考えられている⁶⁹⁾。それゆえに「プティアにて」の図像と「トロイにて」の図像の区別の指標となるネレイスの有無は、アイスキュロス以前のアルカイック期の作品にのみ通用することになる⁷⁰⁾。

アルカイック時代に描かれた「トロイにて」の図像は3点が確認されており、最も古いものは「デロス島出土のアンフォラ（前670年頃）：*LIMC, I, Achilleus: 506**」、次に「ロドス島のイアリュ

ソス出土の鉢（前580年頃）：*LIMC*, I, Achilleus: 507], そして「エトルリア地方のオルヴィエト出土のアンフォラ（前540年頃）：*LIMC*, I, Achilleus: 508*」である⁷¹⁾。これらの年代とモンテレオーネ出土戦車の年代を比較すると、「トロイにてテティスがアキレウスに武具を渡す場面」は、ギリシアにおいて先行し、前6世紀前半までにエトルリア地方に伝わったであろうことがギリシア陶器の図像によって裏付けられる。

b) 「右側パネル」：ここに描かれた「アキレウスとメムノンの一騎打ちの場面」もアルカイック期からギリシア地方やエトルリア地方の陶器などに好まれたモチーフである⁷²⁾。この種の図像は *LIMC*, I/2, Achilleus: 807-847に集められている⁷³⁾。中で最も古いものは「カエレ出土の中期コリントス式の混酒器（前580年頃）：*LIMC*, I, Achilleus: 808*」で、次に古いのは「コリントス出土の後期コリントス式の混酒器（前560年頃）：*LIMC*, I, Achilleus: 811」である。その他、アルカイック期のエトルリア地方出土のものとしては、「ヴルチ出土の擬似カルキス式のアンフォラ（前550年頃）：*LIMC*, I, Achilleus: 815], 「キウジ出土のカルキス式のアンフォラ（前540年頃）：*LIMC*, I, Achilleus: 809」などがある。またアッティカ黒絵式陶器としては、前570-520年頃のもの (*LIMC*, I, Achilleus: 816-824), その他の記念物としては、前600-520年頃のもの (*LIMC*, I, Achilleus: 825-829) がある⁷⁴⁾。

基本的な構図は、完全武装したアキレウスとメムノンの一騎打ちの場面であり、両者とも槍をかまえ盾で防御している。最古の図像は両者互角に戦っているが、次第にメムノンが劣勢に描かれるようになる⁷⁵⁾。またしばしば、2人の戦士の間にアンティロコスの死体が描かれ、アキレウスの背後に自分の息子を応援する母テティスが、メムノンの背後に自分の息子を応援する母エオスが描かれた⁷⁶⁾。メムノンは、エオス（曙の女神）とティトノス（トロイ王プリアモスの兄弟）の子で、エチオピア王であり、血縁関係のよしみから、トロイ戦争ではトロイへ救援に向かった⁷⁷⁾。この物語は『イリアス』には出てこない。失われた『アイティオピス』という叙事詩に由来する⁷⁸⁾。この作品は、「トロイ叙事詩環」を構成する一つの叙事詩である⁷⁹⁾。

c) 「左側パネル」：ここには「アキレウスの昇天の場面」が描かれている。左側に向かってアキレウスの乗った戦車を引く有翼の二頭の馬が前足を高く挙げ、後ろ足で地面を蹴って今まさに天に向かって駆け登ろうとしている (*LIMC*, I/2, Achle: 148, S.180)⁸⁰⁾。この図像はいわゆる「英雄の神格化」apotheosisの場面であると見られている⁸¹⁾。この「アキレウスの昇天の図」と同様の絵が描かれた他の事例は *LIMC* にはなく、そもそも「トロイ環」にもこのような場面はない⁸²⁾。どうもこの図柄はエトルリア固有のものらしい。一方、有翼の馬に引かれた戦車は、エトルリア都市ヴェレトリ出土のテラコッタ・フリーズ（前530-520年）に描かれている⁸³⁾。〈この図像は婚礼の様子を描いたもので、[左側フリーズ]には新郎が無翼の二頭立て二輪戦車に馭者とともに乗り右へ向かっている。その後ろに有翼の二頭立て二輪戦車が続き、同様に馭者と新郎が乗り右へ向かっている。[右側フリーズ]には新婦が無翼の二頭立て二輪戦車に馭者とともに乗り左へ

向かっている。その後ろに有翼の二頭立て二輪戦車が続き、同様に馭者と新婦が乗り左へ向かっている⁸⁴⁾。これらの戦車は婚礼用の「パレード戦車」であり、それぞれのフリーズの先を進む無翼の馬が引く戦車は「此岸の」それであり、後を進む有翼の馬が引く戦車は「彼岸の」それであると解釈されている⁸⁵⁾。

この図像をヒントに、モンテレオーネ出土戦車の3枚のパネルの図像について、「中央パネル」＝「戦場への旅たち」、「右側パネル」＝「将来の勝利」、「左側パネル」＝「帰還に伴う神格化」を表していると考えられている⁸⁶⁾。筆者はこの解釈に基本的に同意するが、もう少し想像力を働かせて見たい。まず「中央パネル」の真ん中に堂々と描かれた盾の図像「ゴルゴンの顔」は魔除であろう。そして「武具を渡す場面」は図像学的解釈に反するが、むしろ「プティアにて」を意識しているように思われる。なぜならばもし「トロイにて」なら、それに続く「右側パネル」の絵は宿敵ヘクトールとの戦いでなければならないが、そうはなっていない。「プティアにて」の場面だとすれば、それは将来の首長となる息子が成人したときに両親から武具が初めて贈られた場面と理解できるだろう。「右側パネル」は「メムノンとの戦いの場面」であるが、これは成年・壮年となって首長として取り組むべき諸問題を象徴的に表したのではないだろうか。そして「左側パネル」は、理想的な貴族戦士としての一生を全うして英雄化される場面を描いたのではないか。すなわちこれら3枚の図像の依頼主は、アキレウスの神話そのものを描きたかったのではなく、アキレウスの神話の素材を使って、息子の息災、成人式、首長としての活躍、そして英雄としての死、という貴族戦士の理想的な一生を描きたかったと考えられないだろうか。さらに想像をたくましくすれば、この戦車はある首長家の子息が成人した際の両親からの贈り物だったのかも知れない。

4. 地下墓壁画に描かれた戦車競技

1) 概要

(1) 総数：エトルリアの地下墓壁画を最も包括的にまとめた図版集『エトルリアの壁画』[1985]によれば、これまでに知られている確実に壁画が描かれた地下墓の数は約180基あり、不確かなものはさらに約100基ある⁸⁷⁾。

(2) 地域分布：同書に登録された178基を出土地別に数えると、タルキニア136基(77%)、キウジ14基(8%)、チェルヴェテリ11基(6%)、オルヴィエト3基、ヴェイイ、ヴルチ、ポプローニア各2基、ブレラ、ボマルツォ、コーサ、グロッテ・サント・ステーファノ、マリアーノ・イン・トスカーナ、オルテ、サン・ジュリアーノ、トゥスカニア各1基となる⁸⁸⁾。つまりエトルリア南部の沿岸都市タルキニアの出土例が突出して多いことが分かる。また北部に位置するポプローニア、マリアーノ・イン・トスカーナ、キウジを除けば、そのほとんどはエトルリア南部から出土していることになるが、主な理由は、もちろん経済的基盤や好みもあるが、北部とは違

い、南部は岩盤が柔らかい凝灰岩であり、地下墓を掘りやすかったからである⁸⁹⁾。ただし、南部においても壁画地下墓は全く一般的ではなく、タルキニアの壁画地下墓はモンテロツィの丘に集中しており、そこで発見された約6,000基の地下墓のうちのわずか2.7%に過ぎない⁹⁰⁾。地下墓壁画の地理的分布には強い偏在性がある。

(3) 時代分布：下の表3は、『エトルリアの壁画』の「壁画総目録」266-387頁にある個々の地下墓の【年代】に基づき筆者が作成したものである。「出土地(基)」の順番は、各出土地における最古の地下墓の年代の古い順である。「先発」は最古の地下墓が「東方化様式時代」に属する都市のグループ、「中発」は最古の地下墓が「クラシック時代」に属する都市のグループ、「後発」は最古の地下墓が「ヘレニズム時代」に属する都市のグループを指す(最古の地下墓が「アルカイック時代」に属するものはない)。「不明」はオルテ出土の1基が時代不明であることを示す。

表3：出土地別にみた壁画地下墓の数と時代分布

	出土地(基)	東方化様式時代	アルカイック時代	クラシック時代	ヘレニズム時代
		前650～575年頃	前575～490年頃	前490～350年頃	前350～100年頃
先発	ヴェイイ(2)	2			
	チェルヴェテリ(11)	4	2		5
	サン・ジュリアーノ(1)	1			
	キウジ(14)	2	2	8	2
	マリアーノ・イン・トスカーナ(1)	1			
	コーサ(1)	1			
	タルキニア(136)	1	57	42	36
中発	グロッテ・サント・ステファノ(1)			1	
	ブレラ(1)			1	
後発	オルヴィエト(3)				3
	ウルチ(2)				2
	ボブローニア(2)				2
	ボマルツォ(1)				1
	トッスカーナ(1)				1
不明	オルテ(1)	?	?	?	?
	合計(178)	12	61	52	52

※ 時代別の合計が177なのは、オルテの1基が時代不明のため。

この表を見ると、タルキニアは、地下墓壁画の「中心地」と呼ばれるものの、「先駆者」ではなかったことが分かる。最も古い壁画地下墓は、ティベル川西岸に位置する最南端の都市ヴェイイ出土の前7世紀第2四半期から中葉のもの(175番)で、次に古いのは、その西隣りの沿岸都市チェルヴェテリ出土の前7世紀第3四半期のもの(12番)、次に古いのは、その北に位置する都市サン・ジュリアーノ出土の前7世紀末のもの(37番)、次に古いのは、そこからずっと離れた北部の内陸都市キウジ出土の前7世紀末から600年頃のもの(26番)、次に古いのは、そこからずっと南西に下った沿岸都市マリアーノ・イン・トスカーナ出土の前600年頃のもの(30番)、次に古いのは、その南隣りの沿岸都市コーサ出土の前6世紀初頭(?)のもの(28番)、そしてその次に古いのが、そこから南東に下った沿岸都市タルキニア出土の前6世紀第1四半期のもの(96番)である⁹¹⁾。つまりタルキニアは、先発グループの中では最も遅く壁画地下墓が出現した都市

である。また各出土地の最古の例を時代順に線で結んでいくと、一筆書きで三角形の領域が描かれる。そして中発グループおよび後発グループの出土地は、北部の沿岸都市ポブローニアを除いて、この三角形の内側ないし周辺に位置する。従って先発グループの描く三角形の領域が壁画地下墓の故郷と言えるだろう。一方で、先発グループの中で、タルキニア、キウジ、チェルヴェテリを除いて、他の都市における壁画地下墓の造営は単発的に終わった。

エトルリア全体の時代別出土数を比較すると、壁画地下墓の造営は、東方化様式時代に始まり（12基）、一気にアルカイック時代にピークを迎え（61基）、少し基数を減らしながらもクラシック時代（52基）およびヘレニズム時代（52基）まで継続したことが分かる⁹²⁾。もちろんその傾向を牽引しているのは、突出して出土数の多いタルキニアの時代分布である⁹³⁾。

2) 戦車競技の場面

（1）戦車競技が描かれた地下墓：『エトルリアの壁画』において、管見の限り、戦車競技が描かれた地下墓は11例が検出され（no. 1-11）、下の表4にまとめた。また戦車競技ではないが、死者が戦車に乗って来世に旅立つ場面を描いたもの4例もこれに加えた（no. 12-15）。戦車のもつ観念の1つとして、注目に値すると考えたからである。

表4：戦車競技が描かれた地下墓

no.	目録番号と墓名	出土地	年代
1	92. オリンピック競技の墓	タルキニア	前510年頃
2	83. オリンピック競技の画家の墓	タルキニア	前500年頃
3	47. 二頭立て戦車の墓	タルキニア	前490年頃
4	17. モントッロの墓	キウジ	前480年頃
5	25. 猿の墓	キウジ	前480-470年頃
6	82. 棺台の墓	タルキニア	前460年頃
7	15. コッレ・カズッチーニの墓	キウジ	前5世紀第2四半期
8	22. ボッジョ・アル・モーロの墓	キウジ	前5世紀第2四半期
9	65. 2台の二頭立て戦車の墓	タルキニア	前450年頃あるいは少し後
10	106. 煙の墓Ⅰ	タルキニア	前5世紀末～4世紀前半
11	137. 第1200墓	タルキニア	前4世紀初頭
12	32. ゴリーニの墓Ⅰ	オルヴィエト	前4世紀中葉～第3四半期
13	33. ゴリーニの墓Ⅱ	オルヴィエト	前4世紀第3四半期
14	34. ヘスカナス家の墓	オルヴィエト	前4世紀末～300年頃
15	54. 枢機卿の墓	タルキニア	前3～2世紀、主に前2世紀

（2）戦車競技の描写：以上の地下墓に描かれた壁画（no. 1-11）を用いて、a) 戦車競技の場面、b) 戦車競技に伴って行われた様々な見世物、そしてc) 観覧席と観客の様子について観察する。

a) 戦車競技の場面：表の中で最も古い no. 1「オリンピック競技の墓」はタルキニア出土の前510年頃（アルカイック時代末期）のもので、これを典型例として取り上げよう（叙述は常に画面の左から右へ進める）。〈[左壁レリーフ]〉：対戦する2人のボクサー。柱のようなもの。左に向かって疾走する4台の二頭立て戦車。先頭の戦車の馭者は鞭を揮いながら後ろを振り返っている。二番手の戦車が猛追する。三番手の馭者のスナップの効いた鞭がしなる。殿の戦車の引き馬

(戦車の左側に繋がれ、折り返し点において戦車が反時計回りに旋回するとき、他の馬を内側へ引く馬)は転倒して仰向けになり、もう一頭は後ろ足で立ち上がっている。轟音を立てて転覆した戦車から馭者が空中に跳ね飛ばされている。馭者は皆、テュニカ(半袖の丈の短い上着)しか着ていないので、下半身は露わになっている。二番手の戦車の馭者はヘルメットを被っている)。柱のようなものは恐らく折り返し地点を示す標柱であろう。転覆する戦車の構図はno. 8にも見られ、お決まりの図柄であったようだ。戦車競技は単独ではなく、他の運動競技や様々な見せ物と一緒に行われたことが分かる⁹⁴⁾。〈右壁レリーフ〉：左へ向かって徒競走をする3人の男。右へ向かって走り幅跳びをする男、円盤投げをする男。左へ向かってフェルス格闘競技をする2人の男)。左右の壁面に描かれている戦車競技と各種の運動競技(ボクシング、徒競走、走り幅跳び、円盤投げ)は、いずれもオリンピア競技祭で行われた種目であり、ギリシアの強い影響が窺われる。運動競技の選手たちは皆、腰紐を巻いただけの全裸である。フェルス格闘競技は、後のカンパニアやローマにおける剣闘士試合の原型であったと考えら、エトルリア固有の葬礼に関係する血なまぐさい格闘競技で、フェルスは長い顎髭がついた赤い仮面を被り、頭に袋を被せられて武器や棍棒を持った男を相手に闘ったり猛犬に襲わせたりするが、踊り手や役者を演じることもある⁹⁵⁾。この壁画にフェルスが描かれているということは、同じ壁画に描かれた戦車競技や運動競技が葬礼の際に行われたことを示唆している。

b) 戦車競技に伴って行われた様々な見せ物：他の見せ物を分類すると、馬術競技、運動競技、雑技、音楽、舞踏の5種類になる。①「馬術競技」：戦車競技とは別の馬術競技もあった。馬と騎手が描かれたものは競馬(no. 2, 3, 5)を表しているのだろう。また走る馬から飛び降りようとする男が描かれているが(no. 2, 5)、これはオリンピア競技祭で行われていたカルペ競馬と呼ばれるもので、騎手はゴール手前で馬から飛び降り、馬勒を握ったまま馬のそばを走るというもので、馬は雌馬を使うという⁹⁶⁾。②「運動競技」：ボクシング(no. 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8)が最も多く、たいていは2人のボクサーが対戦している場面であるが、中には出血する顔面に海綿を当てているボクサーもいる(no. 6)。次に多いのはレスリング(no. 2, 4, 5, 7, 8)で、全て背負い投げの場面である。続いて円盤投げ(no. 1, 3, 6, 8)、徒競走(no. 1, 2, 8)があり、幅跳び(no. 1, 7, 8)の選手は両手に錘を持っている。まれに槍投げ(no. 5)もある。以上はオリンピア競技祭の五種目競技と同じであり、競技者に女性はいない。③「雑技」：運動競技というよりは、むしろ雑技とした方がよさそうなものとして、まずアンフォラの上に乗ってバランスをとる男(no. 8)、燭台を頭に乗せて踊る女(no. 5)、片足跳び(no. 3)がある。ボール競技(no. 5)、跳び板跳び(no. 8)、棒高跳び(no. 3)は現代の概念からすれば運動競技であるが、オリンピア祭の競技ではなかったので雑技に分類した。フェルス格闘競技(no. 1)は本来、宗教的なもので演劇的な要素もあった。役者(no. 5)、小人(no. 4)もこのカテゴリーに含めた。雑技の演者は衣装を着けていた。④「音楽」：アウロス(管が2本ある縦笛)奏者(no. 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9)が最も多く、男も女もいる。そ

の他、キタラを弾く女（no. 10）、チューバを吹く男（no. 5）、キタラを持つ男（no. 5）がある。音楽は運動競技にも舞踏にも伴った。演奏者も衣装を着ていた。⑤「舞踏」：踊る男（no. 3, 4, 6, 10）、踊る女（no. 3, 6, 7, 8, 9, 10）がある。カスタネットを持って踊る女（no. 8, 9）もいる。また兜・楯・槍を帯びて踊る武装踊りの男（no. 3, 5, 6, 7, 8）がある。舞踏の演者も衣装を着ていた。

c) スタッフと設備：演者ではないが、見世物を運営したスタッフと設備も見逃せない。①「スタッフ」：運動競技の審判（no. 3, 4, 5, 7, 8）が多く描かれている。戦車競技の審判（no. 4）が戦車の車輪を指差しているのは、戦車がコースから外れたことを指摘しているのだろう。手を叩いて合図をする徒競走の審判（no. 8）、馬の世話をする馬丁（no. 3, 6）もいる。馬丁は腰布を巻くか全裸である。一方で審判はヒマティオン（体に巻きつけて着る外衣）を着て大きな棕櫚の葉や杖を持っていることから、競技者と見分けが付く。反則を犯したレスラーを鞭で叩こうとしている場面もある（no. 3）。また選手のトレーナー（no. 3）もいる。②「設備」：高さ2mくらいの筆を逆さにして立てたような形の樹木のようなものがしばしば描かれるが、これはおそらく戦車の折り返し点を示す標柱であろう（no. 1, 6, 7, 8）。先に見た標柱は筆のような形をしていない（no. 1）。その他の壁画に描かれた同じ筆のような形のもは、戦車競技以外の場面にも描かれているので（no. 6, 7）、それらの運動競技などが戦車競技場で行われたことを示しているのだろう。また複数の疾走する戦車の前景に標柱が1本ずつ描かれていることから（no. 7, 8）、戦車がまるで並木道を疾走しているように見えるが、恐らくそうではなく、各戦車が標柱を旋回する場面を時間を無視して並べて表現したものではないだろうか。標柱は柔軟性のあるもので、戦車の風圧でしなったように描かれている。

d) 観覧席と観客の様子：エトルリアの戦車競技場が現存しない理由は、全て仮設だったからである⁹⁷⁾。ここではno. 3「二頭立て戦車の墓」に注目する。これはタルキニア出土の前490年頃（クラシック時代初期）のものである。この壁画は真ん中の競技場を挟んで左右に観覧席を配す構図になっており、臨場感を醸し出している。〈[奥壁小フリーズ]：左端に観覧席（木製で2層。床の高さは1メートルくらい。2メートルほどの間隔で柱があり、柱は地面から天井まで届いている。天井には日除けのテントが張ってある。床は板張りなのだろう。床の上にベンチがあり7人の男女がペアになって座っている。競技を見つめながら拳を握る者、口に手を当てて声援を送る者、選手を指差す者などがいる。女性は帽子またはフードを被っている。床の下にも5人の男女がいる。彼らは主人に伴って来た従者なのだろう。彼らのうちの3人の男は熱心に競技を見ているが、残りの男女は愛し合っている。中央に運動競技（2人のボクサー、体に油を塗る男、棒高跳の男、片足跳びの男、騎兵、2人の男、2人のボクサー、2人のレスラー、少年、審判、少年）。右端に観覧席（構造は上記と同じ。床の上には7人の男女がベンチに座り、競技場に向かってしきりと手招きしている。床の下には4人の従者が寝そべっている）⁹⁸⁾。二層構造の観客席は、社会構造を表しているように見える。この奥壁小フリーズはこれだけで完結した絵になっている。

〈[右壁小フリーズ]：左端に観客席（上記と同様）。観客席に向かって馭者が乗った二頭立て戦車が3台停まっている。3代目の戦車の前に馬丁がいる。その後ろには3人の馬丁がいて、1人が戦車の軛を上げ、他の2人がそれぞれ馬を連れてきて、軛に繋ごうとしている。戦車レースの準備をしているようだ。その後ろにも2頭の馬と手綱を取る2人の馬丁が描かれている。繋ぐべき戦車を待っているのだろうか。彼らは少年となにやら話をしている〉⁹⁹⁾。この右壁小フリーズは左壁小フリーズ（省略した）と合わせて1つの大きな絵になる

3) 馭者の身分

ここで疑問が湧く。馭者は何者かという問題である。『イリアス』では通常、戦場に貴族戦士を送迎する馭者は戦士の下僕であるが、パトロクロスの葬送競技の際には貴族自らが馭者となって戦車を駆った。モンテレオーネ出土戦車のようなパレード戦車の主役はもちろん貴族であり、馭者は下僕だったはずだ。では地下墓壁画に描かれた戦車競技の馭者は貴族なのか下僕なのか。この問題については Banducci [2014] の議論を下敷きに考察しよう。

それによると、地下墓壁画に描かれた戦車競技を始めとする様々な見世物は、貴族の葬儀の際に貴族の出費によって催された葬送儀礼であり、高価な戦車や費用のかかる見世物は、それを見にやって来た下層市民や奴隷また他の都市民たちに対して、自らの地位を正当化するためのステータス・シンボルに他ならない¹⁰⁰⁾。この種の競技に出場した馭者の身分を示す明確な資料はないが、タルキニアの「碑文の墓」（前6世紀末）の碑文は、戦車競技ではないが、馬に乗った2人の若者が描かれており、死者の親族である彼らが競技に参加したことを示唆していると解釈し、馭者も貴族であったと考えている¹⁰¹⁾。また貴族の子弟である馭者は、ホメロスの英雄を理想とし、自らをパトロクロスの葬送競技の参加者と重ね合わせ、戦車の転覆という命の危険も顧みず競技に参加することは、葬儀に不可欠な「一種の生贄」 a kind of living sacrifice であり、その試練に生き残り勝利を取めた者はなお一層、貴族としての栄光を増したという¹⁰²⁾。

つまり、ある貴族の葬儀の際にその親族が死を覚悟して戦車競技に参加したという理論であるが、それでは下手をすると今の葬儀の間に次の葬儀の準備をしなくてはならなくなるかも知れない。同時代のオリンピア祭における戦車競技の馭者は雇われ馭者であり、勝利の栄光は戦車のオーナーたる貴族のものとなった¹⁰³⁾。また上述した馬に乗った2人の若者は墓室の偽扉を通して冥府へと旅する人物であるとの解釈もあり、エトルリアの馭者は身分の低い者であったという説もある¹⁰⁴⁾。ホメロスの英雄の理想像にしても、上で紹介した『イリアス』の一場面にあるように、レース中に相手を転覆させるような危険行為を犯したアンティロコスに順位を剥奪された。彼らは決して命を弄んではいなかった。確固とした証拠はないながら、筆者は Banducci の理論には無理があり、地下墓壁画に描かれた戦車競走の馭者は身分の低い者であり、勝利の栄光は戦車のオーナーたる貴族のものとなったと考える。

4) 死者が戦車に乗って来世に旅立つ場面

古代人は一般的に、「墓」は死者の魂が住む「永遠の家」であり、生者は死者の魂が永遠に生きるために食べ物と楽しみを与えなければならぬと考えた。従って地下墓壁画は、生者が見るためではなく、死者のために描かれたのであり、そこに描かれた「宴会」や「見世物」は、永遠の家で死者が永遠に生きるための「食事」と「楽しみ」であり、死者が生前に自ら参加した葬礼や葬送競技の場面であった。壁画の目的は、生前の楽しい生活を死後にも永遠なものにすることであった。このような「現世」の生活を描いた図像は、前6世紀後半から圧倒的に多くなった¹⁰⁵⁾。ところが前4世紀になると、代わって「彼岸」の世界が描かれるようになった。そのことについてパロッティーノは、墓の中で死者が永遠に生きるという原始的な観念が廃れ、ギリシアの影響による黄泉の世界の信仰の普及と説明している¹⁰⁶⁾。

そこで、戦車を描くことのもう1つの意味について考察する必要がある。表4にあげた4つの壁画 (no. 12, 13, 14, 15) の主題は共通しており、それは死者の旅立ちと冥界への到着である。ここでは32「ゴリーニの墓 I」を取り上げて、その場面を詳しく見よう。これはオルヴィエト出土の前4世紀中葉から第3四半期（ヘレニズム時代初期）のものである。〈[墓室右側部分]〉：この物語は右から左へ移動する。まず右端にチューバ奏者がおり、その前に葉冠を被った死者が二頭立て戦車に乗って左へ向けて出発する。その背景には巻き物を手に持つ有翼女性魔人が立っている。戦車の進む先には宴会の場面が描かれ、3台のベッドの上に横臥した3人の男たちが、到着した戦車の方を見て、死者を宴会に招いているように見える。この宴会場面の左にもベッドがあり、2人の人物が横臥してワインを飲んでいる。その左にはアウロス奏者とキタラ奏者が音楽を奏でている。さらにその左には、背の高い2本の燭台が立ち、テーブルの上に香炉や大甕などが置かれ、2人の従者が宴会場の方を見ている。そして左端に、玉座に座ったギリシアの冥府の王ハデスと妃ペルセポネが談笑している。チューバ奏者（とキタラ奏者 no. 13・角笛奏者 no. 14）は葬送音楽を奏でる楽団だろう。この壁画の場合、戦車は競技用ではなく、死者が冥界へ行くための乗り物である。馬が前足をあげているのは、戦車が出発したところを表したものと思われる（他の戦車はゆっくりと進んでいる no. 13, 14, 15、徒歩や馬の場合もある no. 15）。有翼の女性魔人は死者の案内人だろうか。彼女が手に持つ巻き物には死者の履歴が書かれていたのかも知れない。死者が訪れた宴会場は、此岸のそれではなく、彼岸のそれに違いない。とするとベッドで宴会を楽しんでいる男たちも冥界の住人ということになる。彼らは新来の死者の祖先たちであった（事実、この墓はレイニエ家の所有で、5世代にわたる人名にはエトルリア連合長官など多くの官職名が付されている¹⁰⁷⁾）。死者が最終的に目指すところは冥府の支配者の前である。この壁画の左側部分には、牛・鳥・兎・鹿などの肉が吊り下げられた場面、従者たちが台所で料理する場面、大きな竈で煮炊きする場面、そして料理を配膳する場面が描かれている。これらの料理もまた、この世のそれではなく、冥界における宴会に供されるものであろう。料理する従者た

ちにも名が付されていることから、彼らの身分の自由度の高さが窺える¹⁰⁸⁾。

パロッティーノが言うように、確かにヘレニズム時代の壁画は、明るく楽しい此岸ではなく、ギリシアの冥府神やカルン（ギリシアのカロンに由来）やエトルリアの魔人たちとともに彼岸を描くようになる（ただし上の壁画は暗くない）。それに伴って現れた死者の乗り物としての戦車という観念は、しかし、先にみたアルカイック時代に属するモンテレオーネ出土戦車のパネルレリーフが示すように、古くからあるエトルリア固有のものだったのではないだろうか。

5. おわりに

以上、エトルリアを中心として古代地中海世界における戦車の普及とその機能の変遷を概観した。戦車には5つの要素（戦闘・運搬・高価・高速・回転）が常に備わっており、そのうちのどの要素が突出するかによって、ある地域ある時代における戦車の意味合いに違いが生ずると仮定した。前2000年紀初頭の近東において戦車が誕生し、前14～13世紀のエジプトの戦車は平原で戦車戦を展開し、戦車から弓を射る（戦闘）あるいは戦士の送迎（運搬）に使用された。平原の乏しい同時代のギリシア（ミケーネ）では、戦車から弓を射撃することはなく、一騎討ちをする貴族戦士を戦場に送迎するため（運搬）に使用された。しかし前7世紀になると重装歩兵密集隊戦術が普及し、一騎討ちが廃れたのと期を同じくして送迎の機能は廃れ、オリンピア祭のような場における競技（高速）に用いられるようになる。鉄器時代のイタリア半島でも、当初は戦士の送迎に使用され、後に死者が冥界へ行く乗り物（運搬）として観念された戦車は、ギリシアと同様の理由で送迎の機能は廃れ、次第にパレードに用いられるようになり、首長の威信材（高価）としての機能が突出するようになる。この場合、戦車に搭乗して民衆に見られるのは首長であるが、前6世紀以降になって戦車競技が盛んになると（高速）、搭乗者は貴族自身ではなくその従僕となり、首長の立場からすれば、見られる側から見せる側となり、勝利の栄冠は馭者ではなく戦車のオーナーたる貴族のものとなった。このように戦車の機能は変遷したが、その背景には常に国家の形成と維持という支配者の意思があった。

筆者の当面の関心は、都市ローマの起源（伝承では前753年）と戦車競技との関係にあると上述したが、この時期にローマで戦車競技が実際に行われた可能性は、考古学的証拠により十分にある。また出土した戦車においても地下墓壁画に描かれた戦車においても先駆者であったヴェイイは、ティベル川を挟んでローマと目と鼻の先に位置した。従ってこの時期のローマと戦車との関係は、なおさら現実味を帯びてくる。ローマの問題については、小論では触れる機会がなかった戦車の（回転）という要素から、次回に考察したい。

参考文献

Banducci [2014] : Banducci, L. M., Mourning Deaths and Endangering Lives: Etruscan Chariot Racing

- between Symbol and Reality, *Papers of the British School at Rome*, Vol.82 [2014], p.1-39。
- Bonamici / Emiliozzi [1999] : Marisa Bonamici / Adriana Emiliozzi, Il carro di Monteleone di Spoleto (Rep. 87) dalla necropole al Colle del Capitano, Emiliozzi [1999], p.179-190。
- Crouwel [1999] : Joost H. Crouwel, Il Mondo Greco, Emiliozzi [1999], p.11-13。
- DKP* : *Der Kleine Pauly*。
- DNP* : *Der Neue Pauly*。
- Emiliozzi [1999] : Adriana Emiliozzi (a cura di), *Carri da Guerra e Principi Etruschi: Catalogo della Mostra*, 《L'Erma》 di Bretschneider, Roma, [1999]。
- Emiliozzi [1999-1] : Premessa, Emiliozzi [1999], p.1-2。
- Littauer / Crouwel [1999] : Mary A. Littauer / Joost H. Crouwel, Antefatti nell'Oriente Mediterraneo: Vicino Oriente, Egitto e Cipro, Emiliozzi [1999], p.5-10。
- LIMC* : *Lexicon Iconographicum Mythologicae Graecae*。
- OCD* ³ : *Oxford Classical Dictionary*, 3rd ed.。
- OCD* ⁴ : *Oxford Classical Dictionary*, 4th ed.。
- OEAG&R* : *The Oxford Encyclopedia of Ancient Greece & Rome*。
- Osborne [1996] : Robin Osborne, *Greece in the Making 1200-479 BC*, Routledge, London and New York, [1996]。
- Pallottino [1984] : Massimo Pallottino, *Etruscologia*, settima edizione rinnovata, Hoepli, Milano, [1984]。
- RE* : *Pauly Realencyclopädie der classischen Altertumswissenschaft*。
- Sestieri [2013] : Anna Maria Bietti Sestieri, Chapter 35, Peninsular Italy, Harry Fokkens and Anthony Harding (eds.), *The Oxford Handbook of the European Bronze Age*, Oxford University Press, [2013], p.632-652。
- Spivey [1997] : Nigel Spivey, *Etruscan Art*, Thames and Hudson, London / New York, [1997]。
- Woytowitsch [1978] : Eugen Woytowitsch, *Die Wagen der Bronze- und frühen Eisenzeit in Italien*, C. H. Beck'sche Verlagsbuchhandlung, München, [1978]。
- 『イーリアス（下）』 [1958] : ホメーロス『イーリアス（下）』 呉茂一訳, 岩波書店 [1958]。
- 『エトルリアの壁画』 [1985] : M. パロッティエーノ, S. シュタイングレーバー, F. ロンカッリ, C. ヴェーバー・レーマン, 青柳正規, L. ヴラッド・ボレリ 『エトルリアの壁画』 青柳正規, 大槻泉, 新喜久子訳, 岩波書店 [1985 / 原書1985]。
- 『ギリシア・ローマ神話辞典』 [1960] : 高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』 岩波書店 [1960]。
- シュタイングレーバー [1985] : シュテファン・シュタイングレーバー 「第1章, エトルリア壁画の分布」, 『エトルリアの壁画』 [1985] 18-23頁。

パロッティエーノ [1985]: マッシモ・パロッティエーノ「総論—エトルリア絵画」, 『エトルリアの壁画』 [1985] 11-17頁。

パロッティエーノ [2014]: マッシモ・パロッティエーノ『エトルリア学』小川熙訳, 同成社 [2014 / 原書, 第7版1984]。

ブリケル [2009]: ドミニク・ブリケル『エトルリア人—ローマの先住民族, 起源・文明・言語』平田隆一監修, 斎藤かぐみ訳, 文庫クセジュ, 白水社 [2009 / 原書2005]。

『ホメーロス』 [1961]: 世界文学体系1『ホメーロス』(散文決定訳) 筑摩書房 [1961], 「イーリアス」呉茂一訳 (173-462頁), 「解説」高津春繁 (474-482頁)。

村田 [1972]: 村田数之亮『ギリシアの陶器』中央公論美術出版 [1972]。

ロンカッリ [1985]: フランチェスコ・ロンカッリ「第6章, エトルリア壁画とその背景—歴史, 社会, 経済, 宗教」, 『エトルリアの壁画』 [1985] 77-82頁。

註

- 1) 以上, この段落のここまでパロッティエーノ [2014] 4頁, 100-102頁, 106頁。
- 2) 以上, この段落のここまでシュタイングレーバー [1985] 18-19頁。
- 3) 文献によって多少の齟齬があるため, 複数の年代を調整して接合した。初期鉄器時代は Sestieri [2013] p.635に従った。東方化様式時代からヘレニズム時代までは基本的にシュタイングレーバー [1985] 42頁に従った。しかし前者は初期鉄器時代の終了を前720年頃とする一方, 後者は東方化様式時代の開始を前7世紀第2四半期とするので隙間が出来る。そこで東方化様式時代の開始を前750年頃とする Spivey [1997] p.201に依拠して隙間を埋め, 境目を前720年頃とした。
- 4) 以上, この段落のここまでブリケル [2009] 21-22頁。
- 5) Osborne [1996] p.121。
- 6) 以上, この段落のここまでロンカッリ [1985] 77-78頁。
- 7) パロッティエーノ [2014] 91-92頁, 95頁, 108頁。
- 8) シュタイングレーバー [1985] 18頁。
- 9) ロンカッリ [1985] 78頁。
- 10) Sestieri [2013] p.643。
- 11) シュタイングレーバー [1985] 18頁。
- 12) ロンカッリ [1985] 78頁。
- 13) パロッティエーノ [2014] 93頁。
- 14) Spivey [1997] p.201。
- 15) Spivey [1997] p.201; パロッティエーノ [2014] 136頁。

- 16) Spivey [1997] p.201。
- 17) パロッティエーノ [2014] 138頁。
- 18) パロッティエーノ [2014] 93-94頁。
- 19) 以上、この段落のここまでパロッティエーノ [2014] 97頁, 121-122頁。
- 20) *OCD*³ [1996], Corsica, p.403。同書ではアラリアの海戦を前535年頃とする。
- 21) 以上、この段落のここまでパロッティエーノ [2014] 124頁。
- 22) パロッティエーノ [2014] 115頁, 118-119頁。
- 23) ロンカッリ [1985] 80頁。
- 24) クラシック時代の終了を前300年頃とする説もある (Spivey [1997] p.200, p.202)。
- 25) パロッティエーノ [2014] 90頁。
- 26) ロンカッリ [1985] 80頁。
- 27) Spivey [1997] p.202。
- 28) 以上、この段落のここまで Spivey [1997] p.202。
- 29) シュタイングレーバー [1985] 27頁；ロンカッリ [1985] 81頁。
- 30) Spivey [1997] p.202。
- 31) 同書はイタリア半島, シチリア島, サルディニア島で発見された青銅器時代から鉄器時代そして前6世紀までの広い意味での「車」の遺物および土偶などを網羅したもので、「戦車」は *Große Wagen der Eisenzeit* (S.30-53) において資料番号5-119 (1つの墓から複数出土することもあるので) 合計126例を記録している。
- 32) 以上、この段落は Littauer / Crowel [1999] p.5。
- 33) 以上、この段落は Littauer / Crowel [1999] p.5-6。
- 34) *OCD*³, Homer, [1996] p.718。
- 35) 以上、この段落は Crowel [1999] p.11-12。
- 36) 以上 〈 〉内は『イーリアス (下)』[1958], 第二十三章「パトロクロスの葬送 および競技」266-319頁の筆者による要約。
- 37) 以上、この段落は Crowel [1999] p.13。ギリシアにおけるホプリテス (重装歩兵) の出現は前8世紀中頃であり、エトルリアでは前7世紀中頃である (Banducci [2014] p.4-5)。
- 38) この数字も墓の数ではなく (1つの墓から複数出土することもあるので), 戦車の数である (Emiliozzi [1999] p.307)。
- 39) 以上、この段落のここまで Emiliozzi [1999-1] p.1-2。
- 40) その他, Woytowitsch [1978] S.47-48, 85 ; Bonamici / Emiliozzi [1999] p.179-190 ; *LIMC*, I/1, Achle: 100, 123, 148, S.152-154, [1981] ; *LIMC*, I/2, Achle: 100, 123, 148, S.206-207, S.209, S.211-213, [1981]。

- 41) 以上, この段落のここまで Emiliozzi [2011] p.10-13, p.17。
- 42) 以上, この段落のここまで Emiliozzi [2011] p.21-27。
- 43) 以上, この段落のここまで Emiliozzi [2011] p.9-10。
- 44) 全体のサイズ Emiliozzi [2011] p.64, 「中央パネル」 p.65, 「右側パネル」 p.75, 「左側パネル」 p.81, 轆 p.95, 車輪 p.97。
- 45) 以上, この段落のここまで Emiliozzi [2011] p.12。
- 46) 「細密画家の杯」とは, アッティカ黒絵式のキュリクス(浅く扁平な酒杯, 二つの把手をもち, 脚は初め低いが, 後に高くなる)の一種で, 腹部に細密画が描かれたものを指す(村田 [1972] 26頁, 94-97頁)。
- 47) 以上, この段落のここまで Emiliozzi [2011] p.61-62。
- 48) Emiliozzi [2011] p.12。
- 49) Emiliozzi [2011] p.17。
- 50) Emiliozzi [2011] p.61。
- 51) 以上, この段落のここまで Emiliozzi [2011] p.12, p.49。
- 52) Emiliozzi [1999] p.312-313, n.19。
- 53) 以上, この段落は Emiliozzi [2011] p.30-35。
- 54) Banducci [2014] p.7-14, p.35。
- 55) 以上, この段落のここまで Emiliozzi [2011] p.60-61。
- 56) 以下, この図像に描かれた神々と人物に関する解説は『ギリシア・ローマ神話辞典』[1960]による(テティス162-163頁, ネーレーイス185頁, ネーレウス186頁, アキレウス13-14頁, パトロクロス190-191頁, ポイニクス260-261頁, ペーレウス254-255頁)。
- 57) 写真: *LIMC*, I/2, Achilleus: 186-205, [1981] S.76-77。
- 58) 解説: *LIMC*, I/1, Achilleus: 186-205, [1981] S.69-72。
- 59) *LIMC*, I/1, S.71。
- 60) *DKP*, Bd.4, Phthia, [1972] K.831。
- 61) *LIMC*, I/1, [1981] S.69。
- 62) *LIMC*, I/1, [1981] S.72。
- 63) 写真: *LIMC*, I/2, Achilleus: 506-541a, [1981], S.109-113。
- 64) 解説: *LIMC*, I/1, Achilleus: 506-541a, [1981], S.122-128。
- 65) *LIMC*, I/1, [1981] S.71。
- 66) *LIMC*, I/1, [1981] S.71; S.127。
- 67) *OCD*⁴, Aeschylus, [2012] p.26。
- 68) *LIMC*, I/1, [1981] S.72; S.127。

- 69) *LIMC*, I/1, [1981] S.122。
- 70) *LIMC*, I/1, [1981] S.72。
- 71) *LIMC*, I/1, Achilleus: 506-508, [1981] p.122-123。
- 72) *LIMC*, I/1, [1981] S.180。
- 73) 写真：*LIMC*, I/2, Achilleus: 807-847, [1981], S.136-139。
- 74) 解説：*LIMC*, I/1, Achilleus: 807-847, [1981], S.175-181。
- 75) *LIMC*, I/1, [1981] S.175, 808*; S.176, 812*。
- 76) *LIMC*, I/1, [1981] S.180。
- 77) 『ギリシア・ローマ神話辞典』[1960], メムノーン, 284頁。
- 78) *LIMC*, I/1, [1981] S.175, S.180。
- 79) 「叙事詩環」の「環」cycleとは、いくつかの叙事詩の連続を指す。「トロイ環」はトロイ戦争をめぐる二大叙事詩の間隙を埋めるものであるが、それでも間隙や重複が存在する。「トロイ環」は8つの叙事詩から構成され、扱う出来事の古い順に『キュプリア』『イリアス』『アイティオピス』『小イリアス』『イリオンの陥落』『帰国物語』『オデュッセイア』『テレゴネイア』で、二大叙事詩以外は全て散逸した。散逸した叙事詩の作成年代は、二大叙事詩の文字化より後で、前600年と前500年の間であるが、トロイ環に含まれる語りの諸要素は、二大叙事詩よりも古く、叙事詩環によってもまた二大叙事詩によっても活用された（以上、この段落は *DNP*, Bd.3, Epischer Zyklus, [1997] K.1154-1155；*OEAG&R*, vol.5, Poetry, Greek Epic, [2010] p.348-349；*OCD*⁴, Epic Cycle, [2012] p.511；『ホメーロス』[1961] 475頁）。
- 80) AchleはAchilleusのエトルリア語名のバリエーションの1つである(*LIMC*, I/1, [1981] p.200)。
- 81) 解説：*LIMC*, I/1, [1981] p.213。
- 82) Emiliozzi [2011] p.48。
- 83) Emiliozzi [2011] p.36。
- 84) Emiliozzi [2011] p.37の図版 II.16を筆者が叙述した。
- 85) Emiliozzi [2011] p.36。
- 86) Emiliozzi [2011] p.37。
- 87) パロッティエーノ [1985] 12頁；シュタイングレーバー [1985] 19頁。
- 88) シュタイングレーバー [1985] 19頁。一方、パロッティエーノ [1985] 12頁は、タルキニア140基強、キウジ18基、チェルヴェテリ7基、ヴルチ3基、オルヴィエト周辺3基、ヴェイイ2基、その他、ブレーラ、ボマルツォ、コーサ、グロッテ・サント・ステーファノ、マリアーノ、オルテ各1基と数えている。
- 89) シュタイングレーバー [1985] 19頁。
- 90) シュタイングレーバー [1985] 19頁, 25頁。

- ⁹¹⁾ 以上、()内の数字は『エトルリアの壁画』におけるカタログ番号を指す。
- ⁹²⁾ 『エトルリアの壁画』において、シュタイングレーバーが示したエトルリア全体の時代別基数は、東方化様式時代(前650-575年頃)12基、アルカイック時代64基、クラシック時代49基、ヘレニズム時代53基で(シュタイングレーバー [1985] 42頁)、筆者が出した数字と比較すると、アルカイック時代およびクラシック時代において3基分の増減が見られる。また彼は年代不明のオルテ1基をヘレニズム時代を含めたようである。しかし彼と筆者の数字は基本的に同じであり、東方化様式時代12基は一致している。
- ⁹³⁾ シュタイングレーバーは、タルキニアの地下墓壁画をより細かく8期に区分し、135基のうち東方化様式時代(前575年まで)0.6%、前575~530年(11%)、前530~490年(31%)、前490~450年(12%)、前450~400年(7.4%)、前400~350年(11%)、前350~260年(7.4%)、前260~100年(15.5%)、その他、年代決定の困難なヘレニズム期の墓(3.7%)と見積もり、全体の約1/3を占める前530~490年がピークであり、前5世紀を通じた緩やかな衰退、そして前4世紀における再興を読み取っている(シュタイングレーバー [1985] 27頁)。しかし筆者は、前530~490年がピークであることに異論はないが、前490~260年までは減退した状態でのジクザクの横這い、そして前260~100年に復興を読み取る。
- ⁹⁴⁾ 以上の叙述と解説は、『エトルリアの壁画』カラー図版123-124、解説334-335頁に基づく。
- ⁹⁵⁾ 以上の叙述と解説は、『エトルリアの壁画』カラー図版122, 126、解説289, 334-335, 343頁に基づく。「フェルス」phersuとは、おそらくラテン語のpersonaの語源で、「仮面をつけた人物」を意味する(Spivey [1997] p.113)。
- ⁹⁶⁾ *RE* X2, Κάλπηος δρόμος, [1919] K.1760-1761; Paus.5.9.1-2。
- ⁹⁷⁾ *DNP*, Bd.2, Circus, [1997] K.1211。
- ⁹⁸⁾ 以上の叙述は、『エトルリアの壁画』解説295-297頁に基づく。
- ⁹⁹⁾ 以上の叙述は、『エトルリアの壁画』解説295-297頁に基づく。
- ¹⁰⁰⁾ Banducci [2014] p.5, p.7, p.15-16, p.19, p.35。
- ¹⁰¹⁾ Banducci [2014] p.20。
- ¹⁰²⁾ Banducci [2014] p.1, p.34-35。
- ¹⁰³⁾ *RE*, Bd.18-1, Olympia (Verlauf), [1939] K.25。
- ¹⁰⁴⁾ Banducci [2014] p.20, n.23。
- ¹⁰⁵⁾ 以上、この段落のここまでパロッティーノ [1985] 13-14頁。
- ¹⁰⁶⁾ パロッティーノ [1985] 14頁。
- ¹⁰⁷⁾ 『エトルリアの壁画』285頁。
- ¹⁰⁸⁾ 以上の叙述と解説は、『エトルリアの壁画』カラー図版3-7、解説284-285頁に基づく。

Etruscan Chariots : Transition of the Function.

Hiroshi MAENO

Key words: Etruria, chariot, country

The purpose of this paper is to trace the changes in the functions of “chariots” (vehicles pulled by horses during battles) in the ancient Mediterranean world, chiefly in Etruria. These chariots were inherently characterized by five elements: use in battle, transportability, high costs, high speed, and “rotatability.” To understand the significance of chariots in different areas and historical periods, it is important to determine which of these elements were emphasized. Thus, chariots were not simply war materiel, but were vehicles with extremely diverse functions, each reflecting the particular circumstances of a time and place. My immediate interest is the relationship between chariot racing and the origin of the city of Rome—as stated in legend to be 753 BCE—and this paper presents preliminary considerations in this direction. Two kinds of historical material serve as the basis for these considerations regarding “Etruscan chariots”—that is, chariots in the Italian Peninsula during the Etruscan era. Accordingly, they are: (1) excavated chariots, and (2) chariots depicted on walls of underground tombs.

My conclusions begin with the emergence of chariots in the Near East at the beginning of the second millennium BCE; subsequently, chariot warfare on the plains was developed in Egypt from the 14th to 13th centuries BCE. At that time, chariots were either used as battle vehicles from which arrows were shot or for troop transportation. In Greece (Mycenae), which had comparatively few plains, arrows were not shot from chariots; instead, chariots were used to carry (transport) aristocratic warriors, who then fought on foot. However, from the 7th century BCE, with the spread of phalanx warfare (i.e., heavy-infantry soldiers fighting in close formation), the decline of the individual soldier also coincided with the decline of chariots used for transport. Rather, they became used for competitions such as races, where vehicle speed was emphasized at particular sites which included those of the Ancient Olympics. During the Iron Age on the Italian Peninsula, chariots were initially used for troop transport, after which they were conceived as vehicles on which the dead rode to the Underworld—thus, used for “transport.” Meanwhile, for the same reasons as in Greece (phalanx warfare), the use of chariots for troop transport also declined on the Peninsula. Gradually, they were used in parades, as they became a status symbol of prestigious leaders (here, the high prices of chariots were on display). In this case, prominent persons rode in chariots to be seen by the people. By the 6th century BCE, chariot races became popular—their high-speed capabilities were emphasized—with servants substituting for their superiors as chariot drivers. Here, prominent persons transformed from persons on display to ones who became sponsor of the entertainments. Yet, the victory laurels or crowns were not awarded to the chariot drivers, but to their aristocratic owners. Thus, although the functions of chariots were ever changing, there consistently existed the rulers’ will to build and maintain their countries.

As stated above, my main interest is the relationship between the founding of Rome and chariot competitions. The likelihood that chariot races were actually held in Rome around that time appears to be sufficiently substantiated by archeological findings. Of the chariots which have been excavated or depicted on underground tomb walls, some have been found in Veii, the Etruscan city-state that was near Rome, separated from it by the Tiber River. These facts give some evidence to my contention of a relationship between contemporary Rome and chariots. In regard to my thesis about Rome, this paper did not cover another key element of chariots, namely their ability to turn around (rotatability). My next paper will cover this topic.